芥川龍之介をめぐる女性

森本　修

はじめに、小稿は芥川龍之介の女性関係を興味本位に穿鑿することを目的としたものでないことを断っておきたい。表題の「芥川龍之介をめぐる女性」には、いろいろな受取り方があるであろうが、ここでは殊更に「男女間の関係」をさすのではなく、「単なる知合い以上の関係があった」という程の意味である。勿論、この「関係」にも深浅の差はある。小稿では、芥川夫人もその一人として取上げたし、また、ただ巷間の噂に過ぎなかったであろう女性をも加えてみた。

「芥川をめぐる女性」については、芥川の生前身近かにいた宇野浩二、江口渙、小穴隆一、葛巻義敏、久米正雄、小島政二郎、滝井孝作、広津和郎等によって多く語られている。もっとも、その大部分が「女性」の名前を仮名・頭文字・伏せ字にし、同一の「女性」に対しても各人各様の見解がなされ、「或阿保の一生」にあらわれる女性についても、前述の人々の意見は必ずしも一致していない。しかし、これ等の人々によって語られている言葉を整理検討すると、「芥川をめぐる女性」の輪郭は比較的明瞭に浮上ってくる。

筆者のメモによると、「芥川をめぐる女性」は二十人に及んでいる(この中には、前述のように噂の域を出ない女性も含んでいる)。以下、これ等の女性を年代順(芥川と識合った)にあげ、彼女達が芥川の生涯と作家活動にどのような位置を占めているかをみよう。

「図書」昭和三十三年二月号に、「芥川龍之介のいわゆる〔初恋〕――(未定稿断片)」が発表された。芥川の初恋は、従来余り多く語られていなかったもので、芥川の手になる「未定稿断片」の発表は、貴重な資料の一つであることはいうまでもない。且、編者の葛巻義敏氏はその前書に、「大体、編者はこの号の原稿として、別に彼の『MEINE STUDIE』と題するノォトの裡、『VITA SEXUALIS』(幼時から十歳頃迄)を用意してあったが、それは紙数の関係上、ここに発表することは不可能になった。」と記している。葛巻氏は、その後「芥川をめぐる女性」[1]に、「自伝的エスキス・或阿保の一生」にあらわれない女性の一人として、この「VITA SEXUALIS」にでてくる女性をあげている。従って、年代的にいえば芥川の「VITA SEXUALIS」にでてくる女性が、「芥川をめぐる女性」の最初としてみられるわけであるが、「VITA SEXUALIS」が未発表の今日、彼女が如何なる女性であったかは詳かでない。

芥川が大学へ入って、久米正雄や松岡譲との交際がはじまり、彼等の影響をうけて創作に関心をもつようになって、大正三年二月に久米、松岡、成瀬正一、菊池寛等と第三次「新思潮」を創刊したことは、芥川の将来の進路を決定づけたともいうべき重要な事件であったが、この期間に今一つ芥川の身辺に大きな事件が芽生えかけていた。それが芥川のいわゆる初恋である。芥川の高等学校時代からの親友恒藤恭氏は、「彼にも初恋があった。その委曲は記すまい。[2]そのとき彼は一生懸命であった」と、多くを語っていない。しかし、「順調に進んでゆけば結婚といふ極めて平凡な道程を辿る筈であった」[3]彼の初恋は、破局に終った。彼の初恋の相手というのは、実父新原敏三の経営する牛乳販売業「耕牧舎」の日暮里支店を預る松村浅二郎の姪で、「古版の錦絵の一枚」に似た顔立をしており、富田砕花が当時「寄寓してゐた家の娘の女学校友達で、極めて聰明な頭脳の所有者であった」[5]といわれている。彼女の名前は、葛巻氏によれば「Yぁちゃん」[6]、村松梢風によれば大正三年お茶の水女学校を卒業した「百合子」という女性となっている。[7]

芥川と彼女との交際が何時頃から、何ういう機会で始まったのかは明らかでない。が、大正三年五月十九日付の恒藤恭氏宛の書簡に、「僕の心には時々恋が生れるあてのない夢のやうな恋だどこかに僕の思ふ通りな人がゐるやうな気のする恋だけれども実際的には至つて安全である何となれば現実に之を求むべく一に女性はあまりに自惚がつよいからである二に世間はあまりに類推を好むからである」と書いている。この頃既に恋愛の対象として彼女があったことは想像に難くない。この書簡から二ヶ月経った七月二十日から約一ヶ月間、芥川は千葉県一の宮へ行った。この一の宮滞在期間中の七月二十八日に芥川は彼女へ手紙を出している。手紙の下書には「眠る前に時々東京の事やYぁちゃんの事を思ひ出します」とある。[8]更に十一月三十日には、恒藤に「此頃僕はだん〳〵人と遠くなるやうな気がする殆誰にもあはうと云ふ気がおこらない時々は随分さびしいが仕方がない」と書いている。ところが、翌大正四年二月二十八日付、恒藤恭氏宛の書簡に「ある女を昔から知つてゐた。その女がある男と約婚した。僕はその時になって僕がその女を愛してゐる事を知つた。(略)その約婚も極大体の話が運んだのにすぎない事を知った。僕は求婚しようと思った。(略)家のものにその話をもち出した。そして烈しい反対をうけた」とある。この書簡によって、この日までに芥川の恋は破れたことを知ることが出来る。

芥川の初恋が破局に終った経過をいま少し詳しくみると、Yに芥川の実父と同郷の山口県人の、ある海軍中尉と結婚の話がおこったが、その話があまり進んでいないことを知った芥川は、Yに求婚しようと思って彼女と会う約束をする手紙を出した。が、郵便局の手違いからこの手紙はYへ配達されずに会うことは果されなかった。そこで芥川は、Yに求婚する意思のあることを家の者に話したところが、「如何なる理由からか彼れの養家では極力警戒して果ては先方の家を彼れが訪問することさへ喜ばないやう」[8]になっていたので、当然烈しい反対をうけた。伯母は夜通し泣いた。翌朝、芥川はむつかしい顔をしながら「思い切る」と云った。それから不愉快な何日か続いた後、芥川は彼女に手紙を書いたが返事は来なかった。「一週間程たつてある家のある会合の席でその女にあつた」。しかし、彼女は誰よりも先に帰り、芥川は「空虚な心の一角を抱いて帰つて

来た。」そして、失意の中に学校も少し休み、読みかけていた「イワンイリイッチの死」も途中で止めた。それから「五、六日たつて前の家へ招かれた御礼に行った。その時女がヒポコンデリックになつてゐると云ふ事をきいた。不眠症で二時間位しかねむれないと云ふのである」。二週間程経って、彼女から「唯幸福を祈ってゐる」という手紙が来た。しばらく冷却期間をおいて、芥川は元の平静な生活に戻った。返事がたまっていた手紙も書きはじめ、学校へも通いはじめ、「イワンイリイッチの死」も再び読みはじめた。[10] 二人の仲は、芥川の方が熱心で、彼はこの後も時々彼女のことを思い出していたらしく、大正五年の手帳〔一月二十六日〕の項に、「海軍士官の話を書きつづける。間歇的にくるYのmemoryに圧倒された」と記し、大正六年八月三十日の「日記」には、歯痛で氷枕をして寝ながら「蚊帳ごしに明るい空を見た。さうしたらこの三年ばかり逢ったことのない人の事が頭に浮んだ。どこか遠い所へ行つて恐らくは幸福にくらしてゐる人の事である」（田端日記）とも書いている。また、富田砕花によれば、芥川は彼女の結婚式の前日、当時、中渋谷にゐた砕花のところで彼女と最後の会見をしたというし、芥川自身が結婚した後も、「その初恋の人？　に何とかして会はせて貰へぬだらうかと頼まれたことがあった」が、それは実現されなかったといわれている。[11]

この初恋の破局が、芥川にかなり強い影響を与えたことはいうまでもない。芥川はこの恋愛を通じて、人間の醜さ、エゴイズムを知った。彼は愛にすらエゴイズムを認め、苦しんだ。そして、「独りになると気が沈んだから、その反対になる可く現状と懸け離れた世界に眼を向けようとした。かくて筆を執って書きはじめたのが「羅生門」であり「鼻」であった。この二作が芥川の文壇への登場のきっかけとなったことを思えば、初恋の破局の芥川に占める意義は大きい。

「芥川をめぐる女性」の第三は、「鼻」を書き上げた四日後、大正五年一月二十四日の手帳に記されているCである。葛巻氏は、このCも「或阿保の一生」にあらわれぬ女性の一人としてあげている。[12] Cについては詳しくはわからない。

大正五年七月大学を卒業した芥川は、就職先も決まらず、創作一本で生計をたてて行くにも未だその地位が固まっていなかったので、引続いて大学院に籍をおくことにした。その頃、「新思潮」に発表した「鼻」が「新小説」に再掲されたのを機縁に、同誌から九月特別号の原稿の執筆依頼をうけた。芥川は、この小説の題を「芋粥」と決め、八月一日から書きはじめて十二日に書き上げ、十七日から九月二日まで、久米と二人で千葉県一の宮へ出掛けた。ここは、嘗て初恋の人に想いをよせて手紙を出した地である。この一の宮滞在中の八月二十五日、芥川は中学校以来の友人山本喜誉司の姪で、当時跡見女学校に在学中であった塚本文に求婚の手紙を出している。文の父塚本善五郎は、「軍艦初瀬の乗り組みで参謀」をしていた「海軍の軍人で、明治三十七年日露戦争がはじまって早々に戦死」した人である。善五郎は、「その時三十六歳丁度芥川の亡くなったときと同じ年齢」で、文は五歳だった。「祖父の代に飛騨の高山から出て来て」、当時「芝の東禅寺の隣に住んでいた」塚本家は、善五郎が「死んだ翌年には、祖父と祖母とが相次いで亡くなり（略）

いろいろの点で不自由なので母方の里本所相生町」へ移転した。明治四十年のことである。ここに文の母鈴の末弟である山本喜誉司がいて、芥川が度々遊びに来ていた。叔父とはいえ年があまり違わない山本を兄さんと呼んでいた文は、芥川が遊びに来ると、「兄さん、芥川さんが来たわよ。」と云っていた。文が芥川を識ったのは八歳の時であった。[13] 芥川が文に愛情をもつようになったのは何時頃からであるかは判らないが、前述の大正五年八月二十五日付の書簡に、「文ちゃんを貰ひたいと云ふ事を、僕が兄さんに話して何年になるでせう」と書いているが、初恋が破局に終った（大正三年暮頃）以前のこととは考えられない。大正五年の正月、芥川は塚本家で「かるた取り」をした。この頃、芥川家では龍之介が文を貰えば丁度よいという話が出たりした。芥川は「何時でもいい加減な冗談にして」いたが、次第に文に対して「可成の興味と愛とを持つ」ようになった。そうした一面、芥川は文と結婚するのは不可能だという予感をもっていた。[14] こんなことがあった後、芥川は文と結婚したい旨を家の者に洩らしたらしい。そして、二月に塚本家へ文を「うちの伯母と芝の伯母とがみに行つた二人とも good opinion を持ってかへって来たらしい」。[15] しかし、その頃はまだ龍之介（と芥川家）だけの意思で、山本に「僕が文ちゃんを愛してゐると云ふ事を少しでも文ちゃんに知って貰へたらと思った（略）文ちゃんの僕に対する心もちが少しでも僕にわかつてゐたらと思つた」といい、中間にたってお互の意思を通じてくれるように依頼している。[16] こうして、文にもその意思のあることを知った後、八月に求婚の手紙を書き、縁談が正式にととのったのは十二月であった。両家の間に交された「縁談契約書」には、「文子ハ目今跡見女学校通学修業中ニ付其卒業ヲ俟チ黄道吉日ヲ選ミ更ニ結納為取換ノ上芥川家、娶リ結婚式ノ手続挙行可致」とある。[17] 文はこの時十七歳であった。そして、芥川が海軍機関学校へ就職し、作家としても安定した位置を得た後の大正七年二月二日に結婚式を挙げた。龍之介二十七歳、文十九歳の浅春だった。現行の全集には、大正五年八月から結婚に至る迄の一年半の期間に、芥川が文に出した書簡は十八通収録されているが、その何れもが妹をいたわる兄のような愛情をこめて書かれており、利巧ぶらず、偉がらず、自然で正直で、自分を愛してくれてさえいてくれればよい、自分は今日本で一番金にならない商売で貧乏だが苦楽を共に分ちあおう、自分は文ちゃんを愛している、といったようなものばかりである。

もっとも、二人の楽しい婚約期間にも一つの波瀾があった。それは、夏目漱石の長女筆子をめぐって漱石の門下久米正雄と松岡譲との間におこった恋愛事件が、芥川の身辺に迄及んだことである。筆子に好意をよせていた久米は、漱石の死後も頻繁に夏目家へ出入りして、筆子に求愛し承諾の言葉を得た後、鏡子未亡人に結婚の申入をして一応内諾を得たが、鏡子未亡人は自分の一存で決定しかねて、漱石門下の先輩格の小宮豊隆、鈴木三重吉、森田草平等にはかったところ、彼等は「久米のような軽佻浮薄な男ではいかん、芥川ならよい」と云い、芥川が筆子の婿の第一候補にあげられた。そこで、久米は鏡子未亡人から結婚申入れを断られた上、夏目家への出入りを差止められ、失恋の痛手から郷里福島県へ帰ってしまった。久米がこの事件を「破船」、「和霊」等に描いて一躍文壇の寵児となった

のは芥川の場合とやや似ている。

「和霊」[18]に描かれている芥川（秋山）、筆子（冬子）、文（房子）の関係をみると、「初め中根家（夏目）では、故先生の遺志と云ふ程ではないにしても、その門下の最俊秀といふ所から、冥々の間に、冬子の配偶の候補者として、秋山が挙げられてゐた。而して秋山に其当時もあった約婚の人がなく、又秋山自身冬子を気に入ってでもゐたならば、私たち（久米・松岡）が横合ひから飛び出す事もなく、至極無事に円満な結果を見たかも知れなかった。が、秋山の意中はもう当時既に房子さんといふ今の細君の方に在った」。しかし、「その房子さんが、その秋山が第一候補だつたと云ふ事を洩れ聞いて、自分のやうなものがある為に、秋山が中根家の良婿といふ、立身出世の道を塞いだといふので、自分の方は関はないから、約束を取消して呉れと迫つた。」芥川は、筆子の婿の第一候補に自分が挙げられているという話は、いろいろ誤解をまねきやすいので誰にも話したことはなかったという。唯、文の叔父に当る山本[19]には、「前から何も彼も話し合つてゐる仲なのでその話はした」らしい。文は山本から聞いたのであろう。文が夏目家のことを気にしているのを知った芥川は、早速「夏目さんの方は向うでこつちを何とも思つてゐない如く　こつちも向うを何とも思ってゐません〔原文削除〕僕は文ちゃんと約束があつたから　夏目さんのを断るとか何とか云ふのではありません　約束がなくつても、断るのです　文ちゃん以外の人と幸福に暮す事が出来ようなぞとは、元より夢にも思つてはゐません僕に力を与へ僕の生活を愉快にする人があるとすれば　それは唯文ちゃんだけです」と書いて送った。[20]久米が失恋した時も、芥川は文に「久米は可哀さうです。門下生が反対したばかりでなく×（筆子）××さんも久米がきらひになつてしまつたのですからね。その位なら始から好意を持たなかった方がいいのです。久米は今飯も食へない程悲観してゐます」と久米に同情を与せる手紙を書いている。[21]また、芥川は結婚するにあたっても、久米が失恋の悲境にある最中だったので、久米に遠慮して友人に結婚通知状を出さず、松岡にだけ知らせたと云っている。[22]披露宴は、田端の自宅の近くの自笑軒で催された。結婚式の一週間前、芥川は「自笑軒へ行つてからはずゐぶん極りが悪さうでこれには少し閉口してゐます」と云っていた。[23]

自笑軒といえば、ここの娘「おせっちゃん」も、「芥川をめぐる女性」の一人に加えたい。「おせっちゃん」については、或座談会で、[24]

吉田（精一）　詩の中の人物には、自笑軒の娘さんが出てくるんじゃないんですか？

小島（政二郎）　そんなことはないな。おせっちゃんか。

佐々木（茂索）　キリキリシャンとした人だけれども、別にどうということはない。

小島　大分、茂索に嫁に貰えと勧めた。

佐々木　冗談好きなところがあったからね。

小島　いやまじめに勧めていたよ。

といわれている。

また、年代は少し逆戻りするが、芥川が海軍機関学校教官であった頃（大正5年12月――8年3月）、「或阿保の一生」の18（月）に出て来る女性に会っている。「彼は或ホテルの階段の途中に偶然彼女と遭遇した。彼女の顔はかう云ふ昼にも月の光りの中にゐるやうだつた。彼は彼女を見送りながら、（彼等は一面識もない間がらだった。）今まで知らなかつた寂しさを感じた。……」という彼女は、鎌倉小町園のお上である。大正六年九月十三日付の菅忠雄宛の書簡に、「あなたは私にあやまる必要はありません弟は小町園が宿屋だと云ふ事を知らなかつたのですさうして私が小町園の女中と関係でもあるやうに思つたのです（あなたもさう思つてゐたかも知れませんさう思ふと苦笑が出ます）」とあるので、この頃からの知合いであろう。芥川と彼女との交際は死に至るまで続いた。そして、彼は最後迄彼女を愛していた。彼女への愛は、如何にも卑屈らしい五分刈をした彼女の夫への憎しみとなり、芥川はいつか彼女の夫の死を願っていた（或阿保の一生28）。大正十年か十一年の初秋、下谷の或料理屋へ宇野・菊池・久米・広津が入ると、玄関に芥川の目印といわれた真鍮の鳳凰の頭のついたステッキが立てかけられていた。四人は期せずして「芥川がこの内にいる」という好奇心で二階へ上ると、階段を上った右側の部屋にちらっと大丸髷の女の後姿が見えた。そして、唐紙がスウッと締まった。その後姿をちらっと見ただけで、宇野は「それが鎌倉の『小町園』のお上であることがわかった」。[25]また、大正十五年末には、芥川は彼女に「自分の生活の行詰りを訴へて、一しよに逃げてくれないか」というなことを云っている。[26]更に、死ぬ一ヶ月程前、芥川は小穴隆一に自分の識っている女性を一通り紹介した。その時、芥川に賢い女性に頼ろうとする気持のあるのを読みとった小穴は、「相談するなら小町園のおかみさんがいい。小町園のおかみさんなら大丈夫後日のまちがひもないし、ことによるとあの人ならいい智恵があるかも知れない」というと、「ほんとに君もさう思うのかえ」とにこにこしていたという。[27]

芥川が大正八年海軍機関学校を辞め、本格的な作家活動に入った頃には、この文壇の寵児にあこがれる多くの女性がいた。[28]芥川が「愁人」と呼んだ女性を識ったのは、大正八年六月のことである。「愁人」は、芥川の周囲にいた多くの女性の一人であるが、彼が唯一度の情事を結んだため生涯悩まされた[29]という「或阿保の一生」に出て来る〝狂人の娘〟で、小穴隆一の「二つの絵」、宇野浩二の「芥川龍之介」にはHやSの頭文字で謎めいた女性として描かれている。江口渙は、この〝狂人の娘〟――秀しげ子を、芥川の「晩年の運命の少なくとも三〇パーセントは支配した女性であると判定」している。[30]芥川が秀しげ子を識ったのは、岩野泡鳴を中心とする「十日会」の八年六月の例会であった。「十日会」での秀しげ子の存在は、「兎に角都会的に灰汁抜けしてゐる点で一人目立つた。小柄な彼女は派手好みではなく、寧ろ地味づくりであったが、会に来る度毎に着物から帯から半襟の色気など、目立たない中に調和を考へてゐるやうなところが、他の女達の無造作な服装に較べて灰汁抜けて」いたといわれている。この日、菊池と連立って「十日会」にはじめて出席し、しげ子を見た芥川は、彼よりも早くからこの会に加わっていた広津和郎に「おい、僕を紹介してくれ」と頼んだ。[31]

「我鬼窟目録」（別稿）には、

六月十日　夕方より八田先生を訪ふ。留守。それから十日会へ行く。会するもの岩野泡鳴、大野隆徳、岡落葉、在田稠、大須賀乙字、菊池寛、江口渙、滝井折柴等。外に岩野夫人等の女性四五

人あり。

九月十日　夕方から十日会へ行く。夜眠られず。

九月十一日　この頃どう云ふものか傷神し易し。

九月十二日　愁人亦この雨声を聞くべしなどと思ふ。

九月十五日　始めて愁人と会す。夜に入つて帰る。心緒乱れを止まず。自ら悲喜を知らざるなり。

九月十七日　不忍池の夜色愁人を憶はしむる事切なり

九月二十二日　臥榻に横はつて頻に愁人を想ふ。

九月二十五日　愁人と再会す。夜帰る。失ふ所ある如き心地なり。

九月二十九日　芝へ行つて泊る事にする。愁人今如何。

とある。これによると、はじめて顔を合わせたのが六月十日、それから三ヶ月後の九月の「十日会」から後、九月末迄に二人きりで二度会っている。

広津和郎は、当時のしげ子を「目鼻立ちは当り前であり、飛び抜けて美人とは云へない、云はば十人並の器量ではあつたが、小作りの身体つきは年よりも若く見え、小じんまりした顔の中に伶俐な眼がよく動き、ちよいと上唇の出た口つきが一種魅惑的であつた」といい、[32]江口渙は「ちよつと見たところ相当きれいに見える女ではあるが、それほどきわだつた美人ではない。だが、中肉中背のしなやかなからだに、ほのぼのとした媚態をふかくかくしながら、つね日ごろはそれをあらわに外に見せず、しかも必要とあらば適当な機会に適当な量において、効果的にそれを示す術をよく心得ていた女である」と書いている。[33]秀しげ子（旧姓は小滝）は、明治四十五年日本女子大学校家政学部を卒業、歌を太田水穂に師事し、茅野雅子を中心に女子大出身の歌人を主にする春草会に加わっていた。宇野浩二は、秀しげ子は「女流歌人といはれてゐるが、私はこのナゾの女が何という雑誌に歌を出したか、を知らないから、このナゾの女の歌を、よんだ事はない」といっているが、[34]しげ子の歌は「潮音」に掲載されている。筆者の調べた範囲では、「潮音」の五巻（大正8年）五号に「朝雀」（八首）、七号「夕雲」（八首）、八号「宵闇」（八首）、九号「深む思」（八首）、十号「山の湯」（八首）、十一号「木の葉の音」（五首）、十二号「冬近し」（七首）、六巻二号「沼の夕」（八首）、十号「残るあつさ」（八首）、七巻二号「籠り居」（八首）、四号「春残く」（八首）、九号「深霧」（八首）、十一号「那須野」（八首）、八巻五号〔潮音詠草〕に八首が各々掲載され、「潮音社」の催しには、八年七月十三日田端潮音社の「記念短歌会」、十二年一月十四日「潮音社新年短歌会」に出席、各々その席上詠んだ歌が掲載されている。右の中、芥川を識った以後のものを抜粋すると、

身の願ひたりたらひつゝ安らけくねむるわが頬に笑の上れる　（五ノ九）

砂浜の磯の小道の夕やみにしるくもさけり白粉の花　（五ノ十）

遠くより小夜の小床にきこえ来る嵐の後の人の呼ぶこゑ（五ノ十一）

秋の日のわびしく暮れて灯ともれば人を遠しと思ひけるかも　（五ノ十二）

うるし葉の赤きにそゝぐ雨の色見ゐつゝ心暗かりしかも（六ノ二）

暑き日のしなえ草葉の眺めつゝ想ひはるかに遠かりしかな（六ノ十）

嬉しさはきわまりにけむ言もなし思ひもかけむ君とま見えて　（七ノ二）

やうやうに病おとろへすくすくと身内ととのふ日に逢ひにけり　（七ノ四）

月みればそぞろたぬしもなぐさまぬ心一つのあきらめを知る　（七ノ十一）

たまたまに訪ひこし君の庭の木の冬枯しるくさびまさりけり　（十二年新年短歌会）

等がある。彼女は社交的で華やかな存在であった。「十日会」の他、「三土会」や文壇の各種催しには屢々顔をみせ、また「諸方の劇場で初日に見物に行けば、その当時大抵一度は廊下で会つて挨拶をした」[36]といわれている。芥川も一時はこうしたしげ子の魅力にひかれて「愁人」と呼んだが、後にはしげ子の動物的本能を憎悪し、その執拗さに辟易するようになり、大正十年中国へ旅行するのを機会に、やっとその手から脱れたという。しかし、中国から帰国後も二人の交際は続いていた。彼は「遺書」の一つに、しげ子と「罪を犯したことには良心の呵責は感じてゐない。唯相手を選ばなかつた為に（□夫人の利己主義や動物的本能は実に甚しいものである。）僕の生存に不利を生じたことを少からず後悔してゐる」と書いている。[37]大正九年にしげ子が生んだ男の子が芥川に似ていたことは、彼を著しく悩ませ、「復讐の神」として彼の神経をさいなんだ。はげしい脅迫観念と妄想の世界を描いた「歯車」に、夢にまであらわれて彼を苦しめるしげ子の姿がある。「汽車は煙をあげながら、静かにプラットフォオムへ横づけになった。僕はひとりこの汽車に乗り、両側に白い布を垂らした寝台の間を歩いて行つた。すると或寝台の上にミイラに近い裸体の女が一人こちらを向いて横になつてゐた。それは又僕の復讐の神、――或狂人の娘に違ひなかつた。……」。

芥川は自殺の前にしげ子の夫（工学士といわれる）に会って、スッカリその関係を清算してきたといわれている。[38]

芥川と秀しげ子との関係はかなり有名であったが、同じ頃に谷崎潤一郎の義妹で、後に女優になって葉山三千子といった小林勢以子との艶聞も伝えられていた。勢以子は、「少女らしい虚栄心から芥川の腰ぎんちやくになつて得意」でおり、大正七年八月、芥川がまだ海軍機関学校に在職していた頃、当時十八歳の勢以子は「夏場の鎌倉らしく数名の文学青年（略）をうしろに引きしたがえたまま、芥川のまわりをはいかいしていた」。[39]芥川が秀しげ子と「十日会」ではじめて会った二ヶ月程後の八月十五日、秦豊吉に「久米へ勢以子と小生との関係につき怪しからぬ事を申された由勢以子女史も嫁入前の体殊に昨今は縁談もある容子なれば爾今右様の事一切口外無用に願ひたし」と抗議の書簡を出している。

大正九年春、芥川は江口、菊池、久米、小島政二郎と上野へ展覧会をみに行った帰り、不忍池のほとりの日本料理屋「清凌亭」へ江口を案内して行ったことがある。やはり芥川に案内してもらった宇野によれば、芥川は「清凌亭」へは一人で行くのがきまりが悪くて友達多勢と一緒に行ったという。「芥川が『清凌亭』に一人でゆくのがキマリわるくなつたのは、そこにつとめてゐる、十七八歳の女中が、ちよいと好きになつた」からであるといっている。[40]芥川の愛読者だという当時（大正9年）十七歳の小づくりな弱々しい体つきのこの女中は、「それほど高くないが形よくととのつた鼻と、きれ

の長いきれいな眼と、力のこもつた眉と、そして、それらすべてのあいだからおのずからにしてわき上がる、何か生き生きとした心の動きには彼女の頭のよさを思わせるのに十分なものをもつていた」[41]。この女中こそ、後にプロレタリア文学運動に加わりすぐれた数々の作品を書いた佐多稲子であつた。

大正九年十一月、芥川は宇野、菊池、久米等と大阪へ講演旅行に出掛けた。芥川は、最初大阪から真直帰京する予定であつたが、宇野に伴われて名古屋から宇野の第二の故郷諏訪へ廻ることにした。二十三日昼過ぎ下諏訪に到着した二人は、その夜諏訪へ来た第一の目的である宇野の「ゆめ子物」のモデル芸者ゆめ子に会つて、三人は自動車で上諏訪へ映画を観に行つた。宇野はゆめ子にはじめて会つた時の印象を「年二十一歳、亥の二黒、背はすらりとして高い方で、僕は彼女の、現今特に女類に影をひそめた観のある、撫肩を特に愛する。顔はしやくれ顔で、お世辞にも美人の称号は許し難いが、始終俯向き加減で言葉少なく、髪の毛は太い質でおまけに癖があるのだが、そのため結ひ立てらしいに拘らず、髪の恰好が心持ち投げやつたやうに傾き加減なのが気に入る。さうなると少々味噌歯であるのさへ気に入る」と書いている（旅の日記）。ゆめ子に会つた芥川は、上諏訪へ行く自動車の中でも、映画館へ入つてからも一人ではしやいでおしやべりを続け、それとなくゆめ子の体にふれていた。帰京後、芥川はゆめ子に赤色の巻紙で「『あんな楽しいことはありませんでした』、とか、『僕はこの世界にあなたのやうな人があるとは、……』とか、『僕はただあなたが僕のそばにすわつてゐて、ときどき茶をたててくださるだけで満足です』とか、いふやうな、うれしがらせのやうな、文句」の手紙を出したらしい[42]。また、前述の秀しげ子が宇野とも関係があること（実際はそうでなかつた）を知つた芥川は、小穴に「諏訪にゆめ子といふ芸者がゐるが、これは宇野の女だが、君、その頼むから諏訪へ行つて、君がそれを何んとか横取りしてくれまいか、金は僕がいくらでも出すよ。」と頼んだといわれている[43]。

大正十一年五月、芥川は長崎へ再遊した。十一日、長崎へ着いた芥川は本五島町の花屋という下等の旅館に投宿し、後に芥川を慕つて上京して来た渡辺庫輔、蒲原春夫の案内で梅若の謡の会へ行つたり、大音寺・清水寺を見物したり、道具屋を覗き歩いたり、古画をみたり、時には丸山へ遊びに行つたりして呑気に暮した。丸山では、「結城縮みに八反の帯を締む。東京の芸者と異なる事多し」という美妓照菊（杉本わか）を識つた（長崎日録）。芥川は彼女のために、彼の「河童の画」の中で最大の力作といわれる〔水虎晩帰図〕を銀屏風に描き、「萱草も咲いたばつてん別れかな」の句を戯れに書いて与えた。彼が照菊に画を描いてやつたり、色紙を与えたりしたため、当時或新聞で二人の艶名が伝えられたりした（「新家庭」旅行と女人に関する感想を問ふ）。大正十五年のはじめ、芥川が神経衰弱と胃酸過多・アトニイを併発し湯河原で静養していた時、彼女は見舞の品を送つている。

大正十三年七月、芥川は避暑と仕事とをかねて軽井沢へ出掛けた。二十二日午後一時頃軽井沢の鶴屋へ落着いた芥川は、翌二十三日、震災後金沢へ帰省していた室生犀星に軽井沢へ来るように誘いの手紙を出した。芥川の誘いに応じた犀星は、八月三日軽井沢に到着した。この夏の軽井沢には山本有三、谷崎潤一郎、堀辰雄、片山広子等も来合わせていた。八月十四日に犀星が金沢へ帰つた後も芥川は引続いて滞在し、鶴屋の主人や片山一家と追分へ行つたりした。結局、軽井沢滞在中に「十円札」しか書けず、本ばかり――それも「大分社会主義の本を読んで、さう云ふ方面に多少興味を持つ」[44]た芥川は、「もう一度廿五歳になつたやうに興奮を感じて」[45]いた。芥川は「事によると時候のせゐかも知れない」[46]などといっているが、それは「シバの女王」にもたとえられた、芥川と「才力の上にも格闘出来る女に遭遇した」からであつた（或阿保の一生37）。芥川は、この年上の女性に会い「何やらわからぬ愁心」[47]を感じたが、『越し人』等の抒情詩を作り、僅かにこの危機を脱出した」（或阿保の一生37）。「シバの女王は美人でなかつた。のみならず彼よりも年をとつてゐた。しかし珍らしい才女だったソロモンはかの女と問答するたびに彼の心の飛躍するのを感じた」（三つのなぜ）といわれたこの女性は、当時の日銀理事片山貞二郎の夫人でアイルランド文学研究家・歌人として知られた片山広子（松村みね子）であつた。「もう一度廿五歳になつたやうに興奮」したという芥川廿五歳の年――大正五年は、「鼻」を漱石に激賞されて文壇への第一歩を踏み出した年であり、六月に片山広子の歌集「翡翠」の批評を書いた年でもあつた。社会主義の文献をかなり系統的に読み、片山広子に会つた大正十三年夏は、芥川に一つの転機をもたらした。この年九月「十円札」を発表して以後、十四年一月に「大尊寺信輔の半生」を発表する迄の三ヶ月間芥川は小説を発表していない。

大正十四年九月二十三日から昭和二年一月迄、芥川は「数え年三つから当時十八歳ぐらいまで英国に育つたため、ほとんどおぼつかない日本語をしかしやべれないある少女のために、日を定めて日本文学一般についての個人教授を始めている」[48]。現行の全集には、芥川からこの少女南条勝代に宛てた書簡は七通収録されている。

最初の十四年九月十八日付のものには、「二十三日午後二時頃御光来下され度候」とある。二十三日、芥川をはじめて訪れた時の模様を、南条は次のように記している。「午後二時頃うかがった私は、庭の方からまわってお書斎に案内された。間もなく出ていらした先生は『芥川です。初めまして。』と云って丁寧にお辞儀をされた。その日、英文学はどう云う風にやってゐるのか尋ねられ、それからバアナアド・ショウについて等話した。ショウの劇では何が好きかと聞かれたので、『マン・アンド・スウパアマン』等が面白いと思ふと云った。先生は『何がお好きですか。』と聞いたら『マン・アンド・スウパアマン』も面白い、作品としては『カンデイド』がいゝと思ふと云はれた。帰りに、志賀直哉のものを読んだかと聞かれ、余り読んでゐないと云ふと『夜の光』を貸して下さつた。」そして、この日から昭和二年一月まで、南条は夏休みと、龍之介が湯河原や鵠沼に滞在した時以外は、時々田端に芥川を訪れ、近松、西鶴、斎藤茂吉、森鷗外、佐藤春夫等の作品や、大陸ものの英訳を借りて読み、それを返しに行ってはいろいろな話をした。芥川は、彼女の質問には親切に答え、彼女が遠慮し過ぎると「もつと楽な気持でいらつしやい」と云った[49]。葛巻氏は、「この少女は、『彼をめぐる女性』の中に、誤つて数えられ勝ちである」としているが[50]、南条勝代も「芥川をめぐる女性」に当然加えられるべきである。

昭和二年の「晩春売文日記」〔四月三十日〕に、「平松ます子さん来る。けふは平松さんの引越なり。」という記事がみえる。芥川は「或旧友へ送る手記」に、自殺の「手段を定めた後も半ばは生に執着してゐた。従つて死に飛び入る為のスプリング・ボオドを必要とした。（略）このスプリング・ボオドの役に立つものは何と言つても女人である。（略）唯僕の知つてゐる女人は僕と一緒に死なうとした。」と書いている。先の「晩春売文日記」にみえる平松麻素子こそ　芥川が一緒に死のうとした女性である。「彼女はかがやかしい顔をしてゐた。それは丁度朝日の光の薄氷にさしてゐるやうだつた。彼は彼女に好意を持つてゐた。しかし恋愛は感じてゐなかつた。のみならず彼女の体には指一つ触れずにゐたのだった」（或阿保の一生47）。芥川が彼女を死のスプリング・ボオドに選んだのは、「麻素子さんにお乳がないので、（乳が小さいといふ意）さういふ婦人とならいくら世間の者でも麻素子さんと自分とは関係があつたと言はぬであらうし、また自分も全然肉体関係がなしに、芥川龍之介はさういふ婦人と死んでゐたといふことを人に見せてやりたかつたのだ。よしんば世間の人が疑つたところで自分はさういふ婦人と何ら関係もなしに死んでゆくのは愉快だ。」という理由からであつたといわれている。[51]芥川と麻素子との間には、「死にたがつていらつしやるのですつてね。」「ええ。――死にたがつてゐるよりも生きることに飽きてゐるのです。」という問答が交され、二人は一緒に死ぬことを約束した（或阿保の一生47）。芥川は二人の死場所として、当時仕事場に利用していた帝国ホテルを選んだ。「帝国ホテルは、種々の国際的人物が宿泊する関係上、時たま自殺者があつても、表沙汰にならないといふことを関係者の人からの又聞きの又聞きで聞い」ていたからであった。[52]しかし、芥川と麻素子との死の計画は果されなかった。それは、麻素子が芥川夫人の女学校時代からの友達ということから、「次第に感傷的になった僕はたとひ死別するにもしろ、僕の妻を劬りたいと思ったからで」（或旧反へ送る手記）あるかもしれない。芥川は「スプリング・ボオドなしに死に得る自信が生じた」（或旧友へ送る手記）。帝国ホテルの一室での心中計画？　が未遂に終った後も、麻素子は何事もなかったように時々芥川に会って話したりした。のみならず、麻素子は芥川に青酸加里を一罎手渡し、「これさへあればお互に力強いでせう」とも云ったりした（或阿保の一生48）。

芥川は、仕事場として帝国ホテルの他に、浅草の「春日」という待合を利用していた。「春日」のお上春日とよは、芸者時代はつる助といい後に春日派の小唄の師匠になつた人で、芥川は「あの女の亭主が僕の友だちだよ」と云っていた。或日芥川が宇野を伴って「春日」へ行った時、「春日」の奥座敷の辺から思わず耳をたてるような美しい、透き通った声で語る常盤津が聞えていた。宇野が思わず「実にうまいね。実によくとほる声だね、こんな常盤津、僕は、聞いたことがない」と云うと、芥川はニヤリと笑って「ここのお上だよ、あの声は、日本人の喉からは出ないよ、あれは、間子（あのこ）の喉だよ、つまり、西洋人の喉だよ」という程の美しい声の持主だった。[53]

この「春日」へ、芥川は自殺する約一ヶ月前に小穴を伴って行き、気質、顔つき、皮膚の色、爪の色まで「江戸の名残りを伝えた最も芸者らしい芸者」小亀に別れを告げている。芥川は、この母娘三代の芸者小亀とは早くからの馴染であったらしく、[54]大正十四年の秋に宇野と共に或茶屋で小亀に逢った後、宇野に向っていきなり「君に、小亀をやらうか」と云った。宇野は、これを聞いて「芥川は小亀がかなり好きらしいな、と思った」という。[55]

「芥川をめぐる女性」は、以上の他に大正十二年八月鎌倉の平野屋で識合い、後に芥川を題材にした「鶴は病みき」を書いた岡本かの子、久米正雄が「或阿保の一生」二十七〔スパルタ式訓練〕に出て来る女性だという滝村平蔵の妾（当時芸者？）、九条武子、三宅やす子等の人々もあげられている。

宇野浩二は、芥川の好んだ女性を古典型と浪曼型の二つの型に分けて「芥川夫人、『小町園』夫人、松村みね子――以上の人たちは、はつきり、古典型であり、春日とよは古典型にちかく、小亀は古典型六分半浪曼型三分半であり、謎の女とせい子とはあまりパッとしない浪曼型であろう」としている。[56]小稿に取上げた「芥川をめぐる女性」の中でも、右にあげられている人々（芥川夫人は別として）には、芥川はたとえ一時的にもせよ、「恋愛の感情」を抱いたと思われる。もっとも、何時の場合でも「彼の『恋愛』とは、なんらかの意味で、いつも彼自身への degout として帰つて行つた」[57]のかもしれない。

付記　「或阿保の一生」にあらわれる女性と思われる人達についての筆者の見解は、

1、秀しげ子　十七〔蝶〕、二十一〔狂人の娘〕、二十五〔ストリントベリイ〕、二十六〔古代〕、三十八〔復讐〕

2、「小町園」のお上さん　十八〔月〕、二十三〔彼女〕、三十〔雨〕

3、滝村平蔵の妾？　二十七〔スパルタ式訓練〕

4、片山広子　三十七〔越し人〕

5、平村麻素子　四十七〔火あそび〕、四十八〔死〕

である。

註1　「近代文学鑑賞講座　第十一巻　芥川龍之介」（角川書店昭和33年6月刊所収）

2　恒藤恭「旧友芥川龍之介」（市民文庫版）二七頁

3　富田砕花「芥川君を憶ふ」（改造　昭和2年9月）

4　大正四年二月二十八日付、恒藤恭氏宛書簡

5　富田砕花「芥川君を憶ふ」

6　葛巻義敏「芥川龍之介のいはゆる〔初恋〕」（図書　昭和33年2月）

7　村松梢風「芥川と菊池」（文芸春秋新社　昭和31年5月刊）六二頁

8　葛巻義敏「芥川龍之介のいはゆる〔初恋〕」

9　富田砕花「芥川君を憶ふ」、葛巻義敏は「対手の女性が『士族』でないことが、養家芥川家側の強い反対を生んだ」としている。（筑摩書房「日本文学アルバム芥川龍之介」一七頁）

10　大正四年二月二十八日付、恒藤恭氏宛書簡

11　富田砕花「芥川君を憶ふ」

12　葛巻義敏「芥川をめぐる女性」

13　芥川文「二十三年ののちに」（図書　昭和24年12月）

14 このあたりは大正五年始頃、山本喜誉司宛書簡による
15 大正五年二月十五日付、恒藤恭宛書簡
16 大正五年五月十三日付、山本喜誉司宛書簡
17 「日本文学アルバム 芥川龍之介」二一頁
18 「現代日本文学全集32 近松秋江 久米正雄集」（改造社　昭和3年4月刊）所収
19 大正六年九月五日付、芥川文宛書簡
20 大正六年十二月十二日付、芥川文宛書簡
21 大正七年二月一日付、松岡譲宛書簡
22 大正七年一月二十三日付、芥川文宛書簡
23 「生と死の秘密」（解釈と鑑賞　昭和33年8月）より。
24 宇野浩二「芥川龍之介」（文芸春秋新社　昭和二十八年年十月刊）二三七頁
25 対談「芥川龍之介を語る」（明治大正文学研究　十四号　昭和二十九年十月）
26 小穴隆一「二つの絵」（中央公論社　昭和三十一年一月刊）一〇四頁
27 大正九年五月末、芥川を訪問している日本女子大生森幸枝もその一人である。森幸枝については　筑摩版「芥川龍之介全集」月報七（昭和三十三年十月）に詳しい。
28 村松梢風は、「ある時彼はこの女と誘い合いて、湘南の海岸地の宿屋へ行つて泊つた彼はこの女からよほど強い魅力を感じていた然るにこの一回の情事によつて、女は彼のたねを宿したと云つたそして男の子を生んだ」（芥川と菊池）と書いている。この情事の行われたのは鵠沼で、「我鬼窟日録」から推定して大正八年九月のことと思われる。
29 江口渙「わが文学半生記」（青木文庫）一九二頁、「新日本文学」に掲載された時（昭和二八年二月）には四〇パーセントとなっているが、単行本になって三〇パーセントに訂正されている。また、小穴隆一によれば、芥川は自殺の理由をしげ子とのただ一度の情事に帰そうとしていた（「二つの絵」一八頁）。
30 広津和郎「彼女」（小説新潮　昭和二十五年三月）。なお、この「彼女」では秀しげ子の仮名が、一では藤野ケイ子、二では藤崎ケイ子となっている。
31 江口渙「わが文学半生記」一八八——一八九頁
32 日本女子大学「桜楓会々員名簿」による。
33 宇野浩二「芥川龍之介」二一三頁。
34 岡栄一郎「芥川の短冊」（文芸春秋　昭和二十九年三月）。なお、秀しげ子の名は、岩野泡鳴の「巣鴨日記第三」（大正八年十月六月）泡鳴主催の月見会の記事（「岩野泡鳴全集」第十二巻）、問宮茂輔「芥川龍之介断片」（新日本文学　昭和二十五年七月）にみえている他、岡本かの子「鶴は病みき」、龍井孝作「純潔」（改造　昭和二十六年一月）にも扱われている。
35 小穴隆一によれば、芥川は秀しげ子は「僕に似ている」と云っていたというが（「二つの絵」二八頁）、葛巻氏は「私はその子供にも会ってゐますけれども、似てゐないと思ふのです」と云っている（明治大正文学研究　十四号）。
36 江口渙「わが文学半生記」一六四——一六五頁。勢以子は「痴人の愛」のナオミのモデルといわれている。
37 宇野浩二「芥川龍之介」二一一頁
38 江口渙「わが文学半生記」二〇八頁
39 宇野浩二「芥川龍之介」九四頁
40 小穴隆一「二つの絵」三二頁
41 「芥川龍之介との一時間」（新潮　大正十四年二月）
42 大正十三年八月十九日付、小穴隆一宛書簡。八月二十日付、佐々木茂索宛書簡
43 大正十三年八月二十六日付、室生犀星宛書簡
44 葛巻義敏「芥川をめぐる女性」
45 南条勝代「思ひ出すこと」（岩波普及版「芥川龍之介全集」月報第九号　昭和十年七月）
46 葛巻義敏「芥川をめぐる女性」
47 小穴隆一「二つの絵」九九——一〇〇頁
48 右同書九五頁
49 宇野浩二「芥川龍之介」一六六頁
50 小穴隆一「二つの絵」一〇三頁
51 宇野浩二「芥川龍之介」二四〇——二四一頁
52 葛巻義敏「芥川をめぐる女性」

受贈誌（昭和三十四年一月—三月）

日本文学	一—四月号	日本文学協会
国文学	二—四月号	学燈社
国語学	三十五	国語学会
万葉	三十	万葉学会
国文学	二十四	関西大学国文学会
国語国文学	第八号	福井大学国語国文学会
学習院大学国語国文学会誌	第三号	学習院大学国語国文学会
名古屋大学国語国文学	一	名古屋大学国語国文学会
女子大国文	第十二号	京都女子大学国文学会
言語と文芸	三号	東京教育大学国語国文学会
甲南国文	第三号	甲南女子短期大学国語国文学会
国学院雑誌	一—三月号	国学院大学
女子大文学	第十号	大阪女子大学文学会
説林	Ⅲ	愛知県立女子大学国文学会
語文	第二十一輯	大阪大学国文学研究室
語文研究	第七号	九州大学国文学会
清心国文	第二号	ノートルダム清心女子大学国文学研究室
日本文学誌要	復刊第二号	法政大学国文学会
研究論叢	Ⅱ	京都外国短期大学